愛器を語る

林 祥太郎／アントニオ・マリン・モンテロ 1995 年作

Talk about my favourite guitar Shotaro Hayashi / Antonio Marin Montero 1995

林 祥太郎
1989 年福岡県出身。バルセロナ公立カタルーニャ高等音楽院修士課程首席卒業。これまでに菊地通介、富川勝智、A. ガロベー各氏に師事。アンドレス・セゴビア国際ギターコンクール第 1 位の他多数優勝。
スペイン、バルセロナで開催された、ミゲル・リョベート国際ギターコンクールで第 2 位入賞し「あなたほど心に届く演奏は初めて」と評された。
La Xarxa FM（バルセロナ）や Tokyo FM、テレビ東京などのメディアに出演。NHK 連続テレビ小説『舞いあがれ！』の劇伴にてギターを担当。DUO CHISPA としてチェロ×クラシックギター のジャンル開拓にも挑戦中。

写真：木田新一

――お生まれとギター歴を伺います。

林　1989年福岡県出身です。13歳ぐらいの時に母から「ギターでもやったら？」と言われて、楽器店に見に行ったんですよ。いろんな楽器が置いてある中で、「安いからこれにしなさい」って言われたのがクラシックギター、ヤマハの2万円ぐらいのでした。

――それで先生について？

林　当時中学2年生だったんですが、父の転勤で神奈川県に引っ越して、菊地通介先生に6年間ぐらい習いました。高校生の時に神奈川新人ギターオーディションで入賞して、それでギターのプロになりたいという気持ちになってきました。その後、大学の経済学部に行って、卒業してからスペインのカタルーニャ高等音楽院に留学しました。

――楽器はヤマハで？

林　ある方からマルセロ・バルベロ・イーホを借りてまして、留学中はそれを使ってました。バルセロナの学校の近くに製作家のエリアス・ボネットの工房があったので、そこによく立ち寄って、彼のギターを試奏して、意見を求められたりして仲良くなりました。留学から帰ってきて、そのバルベロ・イーホはお返ししました。 CDを録音することになって、その時に富川智勝先生からアルカンヘル・フェルナンデスをお借りしました。

――それは何年ぐらいの作でした？

林　1980年代だったと思うんですけど、そのアルカンヘルが本当に良くて、こういう楽器が欲しいとずっと思ってました。すると、これまたファンの方から、「今使ってないアルカンヘルがあるから、使ってください」と言われて。それは裏横板がシープレスの珍しいギターでした。それをしばらくお借りして、2枚目のCDではそれを使いました。

――それはフラメンコギターではなくて？

林　いや、クラシック用でした。CDの1枚目と2枚目で違うアルカンヘルを使うって面白いなと思って。

――2本のアルカンヘルは、それぞれ違いますか？

林　全然違います。音色の方向性は一緒なんですけど、やはり材料の違いが明らかにあります。けど、2つ目のアルカンヘルもCDを録ったらお返ししました。それまでずっと自分の楽器が無かったんですね。そういう高級な楽器を買えるお金もなかったので、どうしようかと悩んでたときに、スペインのあるギタリストから、「このマリン使わないんだけど、どう？」って言われて破格の値段で譲ってもらったのがこれです。今日、透過写真を撮って頂いたら、いろいろ知らなかった修理跡が分かって面白かったです（笑）。

――それを買ったのはいつですか？

林　2017年ぐらいです。留学から帰って来て2年後ぐらい。

――マリンはどうですか？

林　僕はスペインのギターの音色が大好きなんです。マリンはいろんなシチュエーションで仕事をする時に重宝しています。他の楽器とやる時も音量が伝わりやすいので、共演者にもよく聴こえてすごく助かります。

――マリンの音は言葉で言うとどんな感じですか？

林　抜けが良くて、コンサートホールでも安心して使えます。ボリュームも確保しつつギターらしさもあるみたいな感じ。その辺のバランスはとてもいいなあって思ってます。欲を言うなら、もうちょっとブーシェのような締まった音のギターが欲しいと思う時もあります。

――ブーシェがお好きですか。

林　ブリームが昔使っていたブーシェを1回だけ弾かせていただいたことがあって、それはYouTubeに動画を上げましたが、一音だけでなんか過呼吸になっちゃうほど。音階だけ、ドレミだけでも「あー素敵！」と思わせる。すごかったですよ。

――マリンにはどのような弦を使っていますか？

林　いろいろさまよって、最終的に落ち着いたのはプロアルテのノーマルです。変な色がないので、この楽器に合っている感じです。

――先ほど透過写真を撮って、表面板にひび割れの修理跡が見つかりましたが、今は状態としてはどうですか？

林　乾燥とか湿気はかなり影響すると思います。2年くらい前の冬に弾いてたら、なんかゴキブリが入ったようなガサガサした音がしたので、びっくりして楽器を振ってたら、表面板がベリベリ、パン！ って割れたんです。割れる瞬間を見た人は少ないと思いますよ（笑）。空気が乾いていたこともありますが、多分ぶつけたとかなんかあって、もともと弱いところが開いちゃったのかもしれません。

――今後の予定というか、方向性はありますか？

林　「自分の得意なことで人に感動と幸せを与えたい」という理念を持っています。その手段としてギターでたくさんの人にそれを届けたいと。それと、新たなギターファンを増やしたいですね。

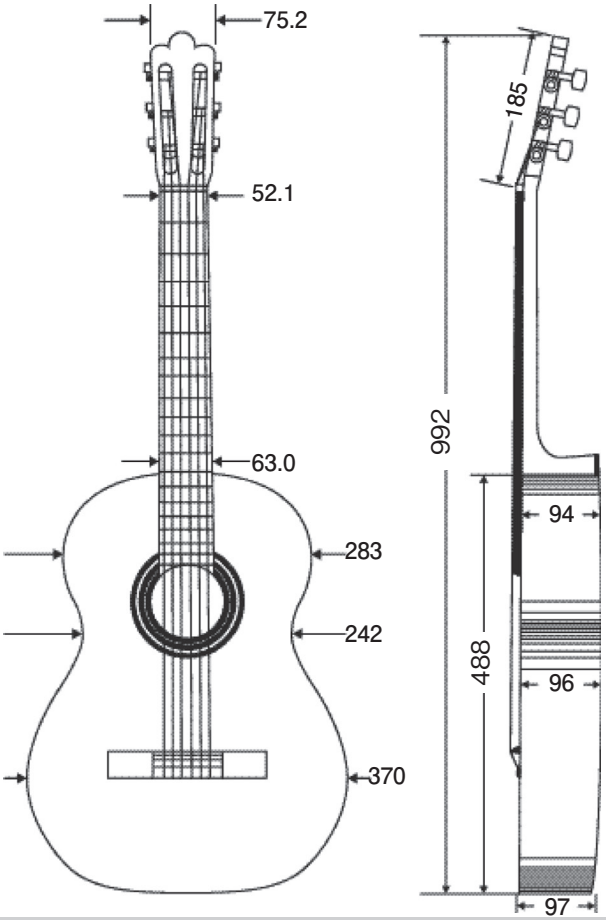
――林ファンも増えているようですね。

林　YouTubeをきっかけにたくさんの方が応援してくださっています。それと、最近小学校などでも演奏しています。浜松のギター製作家の佐藤 剛さんの紹介で、僕のYouTubeの〈旅立ちの日に〉を見てくれた小学校の校長先生が声を掛けてくれたんです。すごく熱心でいろんなネットワークをお持ちで、あちこちの校長先生に紹介してくださり、そこからまた演奏の機会が広がっていきます。ほとんどボランティアですが、聴いてくれた小学生が10年後にギターファンになるとしたら充分に可能性があるじゃないですか。卒業式だと親御さんも聴いてくださって、それも大事なことなんです。

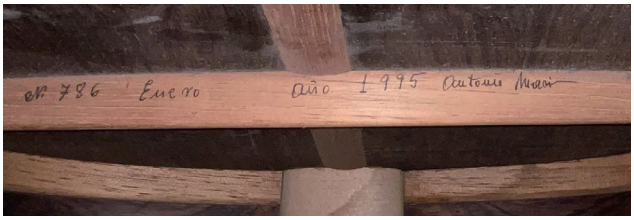
――興味深いお話をありがとうございました。

ANTONIO MARIN MONTERO
GRANADA

透過写真。



アントニオ・マリン・モンテロ（1933-）はスペインのアランブラの宮殿で有名な城下町、グラナダに生まれた。若い頃は家具職人として働いていたが、エドゥアルド・フェレール（1905～1988）のギター工房に出入りするようになってギターに興味を抱き、フェレールの工房で３年半修行し、28 歳で独立した。44 歳の時にフランスのギター製作家、ロベール・ブーシェに出会い大きな影響を受けた。その影響は上の透過写真にも見られる。５本の扇状力木と、それらをブリッジ下でまたぐ横向きの響棒、そしてサウンドホール下の響棒は両端だけが表面板に接していて、それ以外は隙間を空けて５本の力木が下を通っている。また、マリンはブーシェを真似て製作年をラベルではなく裏板の下の力木に書いている。下の写真には「No.786 Enero año 1995　Antonio Marin（1995 年１月　アントニオ・マリン）」とある。



写真：林 祥太郎

DATA

サイズ	
重量	1600g
弦長	650mm
弦幅（上）	42.6mm
弦幅（下）	58.3mm
サウンドホール径	⌀ 91.4mm
駒	29.4 × 189 × 9.2mm
ネック厚（上）	23.5mm
ネック厚（下）	25.2mm
材質	
表板	スプルース
裏・横板	中南米ローズウッド
ネック	セドロ
指板	黒檀
駒	中南米ローズウッド
塗装	セラック
糸巻	ゴトー